戦後ピッケルの雄「モデルRCC」

戦前戦後を通じて日本のピッケルの多くは輸入物を模倣した物が多かった。しかし昭和30年代に登場したモデルRCCは輸入物の長所を取り入れながらも独特の理論に基づいて作られた独創性溢れるピッケルであった。

諏訪部　豊（静岡県）

［日本山岳文化学会　ウッドシャフトピッケル研究分科会］

１．はじめに

本会第2回大会に於いて筆者は「世界のピッケル鍛冶概説」と題してスイス、フランス、イタリア、オーストリアそして日本のピッケル鍛冶について急ぎ足で説明をした。その折り、西本副会長から「モデルＲＣＣはどこで作っていたのか？」との質問を受けた。私はモデルＲＣＣが第2次ＲＣＣ同人の大江幸雄設計による物であることは既に知っていてそれがエバニュー製であることは知っていたので「エバニューです」と答えた。

しかし私はその後、エバニュー製ではないモデルＲＣＣが存在したことを知った。それはTAKAYUKI という人物が作った物であった。そしてこのピッケルには極めて興味深い歴史があるのではないかと考えて調査を始めた。

写真１、エバニュー製モデルＲＣＣ

２．モデルＲＣＣ登場の経緯

第２次世界大戦後、ピッケルの主流はスイス物からフランスのシモンやシャルレの手になる物に移った。彼らのピッケルは軽量かつ実戦的な形状であった。特にヘッドにカラビナを掛けるための穴が開いたモデルが出始めると、この流れは決定的になった。シモンのスーパーＤ及びＥ、シャルレのモンブラン及びスーパーコンタなどが一世を風靡した。門田を含めた国産メーカはそれらのコピー品を作るような有り様だった。

しかし1956年（昭和31年）5月のマナスル登頂に端を発した登山ブームが訪れると新しい登山用具開発の機運が高まった。そこに登場したモデルＲＣＣはシモンやシャルレの物真似とは違い、それまでのピッケルとは一線を画す形状であり、また先鋭的な第２次ＲＣＣの名が冠されていたため大いに注目を浴びた。

３．第２次ＲＣＣと大江幸雄

第２次ＲＣＣ（Rock Climbing Club、以下ＲＣＣⅡ）は奥山章らが中心となり、1958年（昭和33年）1月31日に結成された。大正時代の旧ＲＣＣ創立者藤木九三も招き、創立会員は22名だった。ＲＣＣⅡは現在も存在している組織である。

このＲＣＣⅡ創立会員でもある大江幸雄は1932年（昭和7年）年2月、役人であった父

親の赴任先、旧満州で生まれた。芝浦工業大学時代は山岳部員であると同時に日本山嶺倶楽部にも属していた。滝谷第2尾根P2フランケ芝工大ルートの初登攀者として有名である。

写真２、若かりし頃の大江幸雄氏

大学卒業後は日本専売公社（現ＪＴ）に入社し、機械技術者として定年まで活躍した。現在は千葉県茂原市の郊外で夫人と共に悠々自適の暮らしをしている。最近は山の絵を描くのが楽しみだそうで、内部の造作を殆ど自分で行ったというアトリエ「セロトーレ」にいることが多いそうだ。

写真３、大江幸雄氏近影（アトリエにて）

大江は学生の頃から登山用具の開発に興味を持ち、既に埋込ボルトの開発に着手していた。これは後にＲＣＣ型ボルトとして世に出、現在でも販売されている。

写真４、ＲＣＣボルト

大江はボルトと平行してピッケルも考案していた。大江はアッシェンブレンナーの使い良さに惚れ込んでいた。アッシェンブレンナーはオーストリア・チロル地方スチュバイ谷のフルプメスにあったフルプメス社が製造したピッケルである。フルプメス社は後にスチュバイ社に吸収され、モデル・アッシェンブレンナーはその後も生産された。

写真５、モデル･アッシェンブレンナー

４．大江の目指したピッケル

大江は先鋭クライマーとして、また技術者としてピッケルについて一家言持っていた。それはピッケルはあくまで道具であるべきで、優雅さは不要であるということだ。

大江が目指したピッケルは次のような物だった。

①ピック下辺はアッシェンブレンナーのよう

に直線の方が氷雪に刺した後抜けにくい。
②手がかりとして刺した時や滑落時に確実にブレーキとなるよう氷雪と接触する面積を広くしたい。そのためにはピック下の幅をなるべく広くしたい。
③それに対してピック側面は厚くする必要はなく、強度の許す範囲で削り取ってしまいたい。
④ブレードは湾曲していた方が氷雪を削るのに適している。
⑤ピック先端はベントや山内のような点ではなくてアッシェンブレンナー、あるいはシモンやシャルレのように線、即ちノミ型の方が良い。岩に付いた氷は点状のピックでは刺さるだけであって上手く割れてくれない。
⑥シモンやシャルレのようにシャフト延長上にカラビナホールを開けるとヘッドの強度が落ちるのでブレードにカラビナホールを空けたい。

写真６、ブレードに空けたカラビナホール

５．モデルＲＣＣの登場

このような設計思想に基づいて大まかな形は頭の中にできていた。後はその構想を図面に落として試作に取りかかるばかりになっていた。

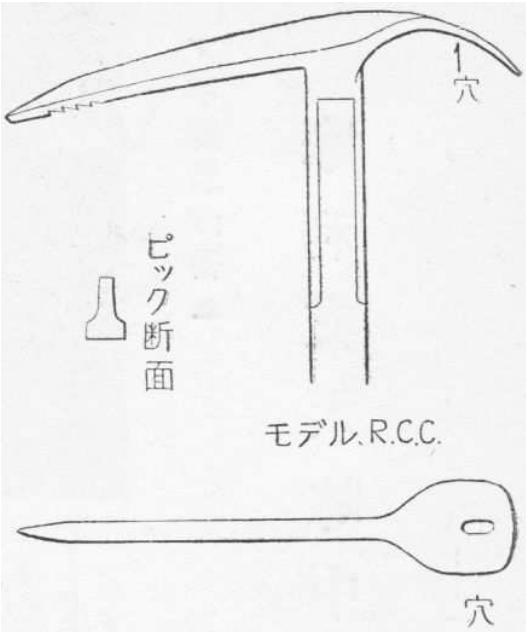
結成間もないＲＣＣⅡでは代表的登山道具であるピッケルにＲＣＣの名を冠して売り出すことがＲＣＣⅡの知名度向上に繋がるとの思惑があった。このため大江の新ピッケル案を聞いた奥山らは大江に製品化を促した。こうしてＲＣＣⅡ発足と同じ年、1958年（昭和33年）9月頃、モデルＲＣＣ初期型が世に出た。

大江の話では初期型は50本程度生産されたようだ。数が極めて少なかったために残念ながら初期型は未だに現物が見つからない。また図面も写真も残っていない。大江の手元にもない。そこで雑誌の記事や広告のイラストを参考にし、後に出た２型を画像処理して描いた初期型が写真７及び８である。

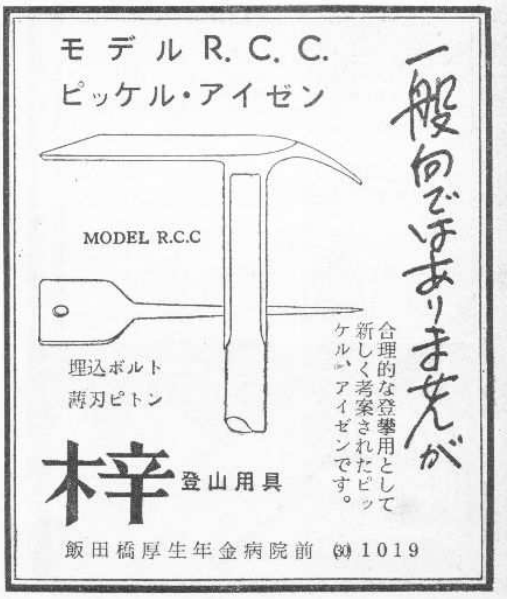
写真７、モデルＲＣＣ初期型（推定１）

写真８、モデルＲＣＣ初期型（推定２）

大江の設計思想通りピック側面は大きく削り取ってある。ピック側面の削り取りが推定1のようにピック部だけであったのかまたは推定２のようにシャフトを横断してブレード近くまで行っていたかどうかは大江自身も記憶がないのではっきりしない。



資料１、「山と渓谷」記事



資料２、「梓」の宣伝広告

資料１は雑誌「山と渓谷」1958年（昭和33年）11月号の記事中のイラストである。また資料２は雑誌「岳人」1959年（昭和34年）1月号に載っている「梓」の広告である。これらによれば初期型は推定2のような形状であったと判断できる。

６．モデルＲＣＣの作者

モデルＲＣＣの最初の作者は田中隆行（または隆之）だった。田中に関しての詳しい情報はないが東京自由が丘で親子で鍛冶屋をやっていたことは分かっている。大江が大学生の頃、自由が丘の学友を訪ねた際、たまたまそこに田中がいたのが知り合うきっかけだった。田中は登山家ではなかった。

ＲＣＣⅡによるピッケル製作の話が決まった時、大江はそれを田中に作らせることにした。しかし専門の鍛冶屋にとってもピッケル作りはなかなか難しく、最初は大江の引いた図面通りに作るのに苦労したようだ。およそ20本程度の試作を経てようやく製品として完成した。

７．モデルＲＣＣの評価

この初期型は当時東京駅八重洲口にあった秀山荘、及び奥山章が経営していて飯田橋にあった梓で販売された。

名にし負うＲＣＣⅡが出したピッケルである。あれこれ評価を受けるのは当然で、シモンやシャルレに比べて「重い」という評価が出た。これに関して大江は「これはシャフトにヒッコリーを使った結果である。ヒッコリーは重いが丈夫であり、シャフトはぜひヒッコリーにしたかった。またピッケルは重量配分が重要であり、ヘッドだけ軽くする訳にはいかず、やや重めの仕上がりとなった。しかしシモンやシャルレに比べて極端に重いとも言えない」という見解であった。

また「モデルＲＣＣは焼きが甘い」という評価も受けた。これについても大江は「ピック先端を普通のヤスリで研ぐことができるようにわざと焼きを甘くした。飽くまでもピッケルを道具と考えた結果である」と

語っている。

８．モデルＲＣＣの変化

さて、初期型は翌1959年（昭和34年）に2型に変化した。2型はブレードだけでなくシャフト線上にもカラビナホールが開いている。これは大江の話ではブレード先端でザイルを擦ってしまう事例が発生したためとのことである。しかし筆者はそれ以外にやはりシャフト線上にもカラビナホールがないと古くさく見えたためではないかと考えている。

また初期型のピック側面削り取りが推定２のようであったか否かに関わらず、シャフト線上にもカラビナホールを空けた影響で削り取りはシャフトまで及ぶことはなくなった。

写真９、モデルＲＣＣ第２型

ところで大江がこだわったピック下面の幅はどうだっただろうか。写真10は2型を下から見た写真である。当時のシモン・スーパーＤ及びシャルレ・スーパーコンタとピック厚みを比較するとモデルＲＣＣがかなり幅広であったことが分かる。

写真10、ピック下面（上からシモン、モデルＲＣＣ、シャルレ）

2型も初期型同様に秀山荘と梓で販売された。初期型、2型共にピックには製作者の名前TAKAYUKI、及び設計者の名前Design S.OOEが記されている。ピック反対側に記されたModel RCC も含めて銘は打刻ではなくて薬品処理、いわゆるエッチングによって刻んだ。

写真11、モデルＲＣＣの銘（表）

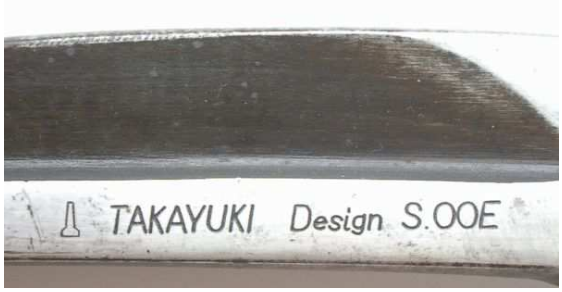


写真12、モデルＲＣＣの銘（裏）

こうして販売開始されたモデルＲＣＣであったが1年余りで作り手がいなくなってしまった。それは田中が家を出てしまったためである。大江によると原因は交際相手を親に反

対されたからとのことである。このため2型は300～400本程度で生産ストップとなった。

９．エバニューへの生産移管

その後モデルＲＣＣの生産はエバニューに移管された。1960年（昭和35年）のことである。エバニューに移った経緯は明らかではない。これについてはＲＣＣⅡのメンバーであり、当時エバニューの顧問をしていた芳野満彦によると「私が働きかけをしたということではない。元々田中とエバニューとは付き合いがあり、田中が家を出る際にエバニューに生産移管を依頼したのではないか」とのことだった。芳野によるとエバニューではピッケルを西日暮里にあった鍛冶屋に作らせていたとのことである。この鍛冶屋の屋号は不明であり、当時60才前後の主人が一人で作っていたとのことである。

この鍛冶屋が作ってエバニューが販売したモデルＲＣＣを3型と称しておく。3型は数多く生産されたので多くのクライマーが手にした。3型は初期型及び2型とは若干形状が異なっている。それはピックの前傾角度が初期型、2型の大江オリジナルほどきつくないという点である。どうしてこのような変化があったのかは分かっていない。エバニューでは1973年（昭和48年）頃まで生産していた。エバニューでのモデルＲＣＣの生産は年間100本余りとして14年間で2000本程度と推測できる。もっと作られたかも知れないが一人でやっていたという鍛冶屋の生産能力を考えると多くても5000本は越えなかったと考える。

10．当時のその他のピッケル

大江は東京トップの顧問をしていたこともあり、モデルＲＣＣに続いてシルバーザッテルの設計も行った。また樋口産業（現クロスター）のタンネという名のピッケルも大江の設計によるものであった。

写真13、シルバーザッテル（東京トップ製）

写真14、タンネ（樋口産業製）

また蛇足ながら今回の調査でエバニューの代表的ピッケルであるグレッチャーとローツェは芳野の設計による物であったことが判明した。ヘッドに刻まれたモデル名を表す独特の文字は芳野の書いた物である。(以上文中敬称略)

写真15、グレッチャー（エバニュー製）

10．謝辞

今回の調査にあたっては当人である大江幸雄氏及び芳野満彦氏にご協力頂いた。ここに深く感謝申し上げる次第である。また当会の理事であり大江氏と同じ日本山嶺倶楽部所属の羽田英治氏には大江氏とのコンタクトを取って頂いた。またこれを機会に当会に入会した和田好弘氏からは貴重なモデルＲＣＣ２型を拝借した。合わせて感謝申し上げる次第である。

［参考文献］

・佐瀬稔「喪われた岩壁－第２次ＲＣＣの青春群像」山と渓谷社、1982年
・新田次郎「栄光の岩壁」新潮社、1973年
・碓井徳蔵「登山用具入門」池田書店、1960年
・吉田二郎「山と渓谷、1958年（昭和33年）11月号、登攀用具を再点検する⑵ピッケル」
・エバニュー社カタログ1964年（昭和39年）版